P-221　気腫肺に発生し非腫瘤性陰影を呈した肺癌の1例

[1]県西総合病院　呼吸器外科，[2]呼吸器内科，[3]病理，[4]筑波大学臨床医学系外科

稲毛　芳永[1]，角　昌晃[2]，斎藤　敏彦[2]，藤原　正親[3]，酒井　光昭[4]，山本　達生[4]，石川　成美[4]，鬼塚　正孝[4]

【背景】肺癌が腫瘤性陰影を呈さない場合には早期診断が困難なことがある．
【症例】49歳，男性．主訴は血痰．胸部単純X線では，右下肺野に横隔膜ドームに掛かる淡い網状影を認めた．胸部CTでは両側全肺野にびまん性の気腫性変化を認めると同時に，右$S^{10}b$に一部にconsolidationを伴う不規則な網状影を認めた．血液検査では，炎症所見は陰性であり，CEAが7.2ng/mlと軽度上昇していた．気管支鏡を施行したが悪性所見が得られず，血痰も再発しないため経過を観察したところ，3カ月後のCTで陰影の増強を認めたため胸腔鏡下生検を施行した．その結果，術中迅速病理組織検査で腺癌と診断し，右肺下葉切除術（ND2a）を施行した．切除標本の割面では，腫瘍は黄白色の充実性部と含気部が混在する境界不明瞭な8×5×2cmの非腫瘤性の病変として認められた．組織学的には一部に扁平上皮癌成分を伴う乳頭型腺癌であり，癌細胞は充実性部においては線維性間質を伴って乳頭状に増殖していたが，含気部においては気腫性または嚢胞性変化を伴った肺胞および嚢胞壁に沿って増殖していた．リンパ節転移は認めなかったが胸膜浸潤を認め，術後病理病期はpT2（p2）N0M0 Stage IBであった．術後1年3カ月の時点では明かな再発を認めていない．
【結論】気腫性変化を伴う肺に発生した肺癌は典型的な腫瘤性陰影を呈さないことがあり，これを常に念頭に置いて診療に当たる必要がある．